

## 第五回 民博若手研究会 記録

実施日時：2013年4月28日（日） 午前11時から4時30分

場所：第3セミナー室

出席者：浅川、足立、飯島、大川、奈倉、比留間、山田、渡会

ゲストスピーカー：アンジェロ・イシ

記録：奈倉

### 今回の研究会のテーマ設定について

事前に渡会さんがテーマを調整してくださり、これまでの在日ブラジル人研究で注目されてこなかった「自己実現」、「生活世界」をテーマについてお二人に異なる視座から発表をしていただくことになった。渡会さんは個人レベル・ローカルレベルから、自己実現感という個人の感情について報告し、イシさんは集団レベル、トランスナショナルレベルから「イベント」を通じたネットワークづくりについて報告することになった。

渡会さんの報告の中でも触れられたが、実際には両者の状況が重なり合っており、ミクロな語りのなかにマクロな語りが現れたり、トランスナショナルレベルの活動がローカルな集団・個人の生活世界や故郷認識、アイデンティティに影響を及ぼしたりすることがあることが見られた。

#### 1. 発表者1：渡会 環（愛知県立大学）

タイトル：自己実現から考える在日ブラジル人の生活世界

##### 【内容】

従来の在日ブラジル人研究では、短期的・中期的期間での労働を目的とした「デカセギ」として日本に滞在しているという言説が、彼らの就労や就労に直接結びつく活動以外に研究者の関心を惹きつけてこなかった。これらの動向を踏まえ、本発表では、在日ブラジル人の第三世代の20代から30代の女性の中で、メーキャップコースを受講することを通して自己実現を目指す女性を考察の対象とし、彼女たちがどのような生活世界を創造しようとしているのか、また「デカセギ」イメージに対抗した自己イメージを創りだそうとしているのか否か、という問題意識をもちながら、報告者が静岡県掛川市、岐阜県美濃加茂市、群馬県大泉市で行った実地調査を基に報告が行われた。

まず、彼女たちが資格取得コースにお金を使うようになった背景が紹介された。リーマンショック以降、在日ブラジル人の労働に対する考え方に変化が見られた。彼女たちはその変化を、「リーマンショック以前は仕事だけを考えていた」が、その後は個人の「成功」、「自己実現」、「投資」を考えるようになったと語る。ただ実際はこうした語りはデカセギ現象が始まったころよりみられ、リーマンショック後に一層強化されたものである。「成功」

や「自己実現」といった語りはそもそも、ブラジルの中産階級の価値観を「文化資本」として日本へ持ち込んでいることの顕在化である。こうしたブラジルの中産階級の価値観が日本での個人への「投資」に影響を及ぼしているのである。資格取得コースに参加することの他にも、休日を利用してタイヘマッサージの研修へ行くなどの「投資」と消費が混ざり合った過ごし方も見られるようになった。

次に、メーキャップコースをエスニック・ビジネスに位置付けながら、資格取得証明書がブラジルで認可されるのか、彼女たちの「自己実現」にどれくらい寄与するのかといった、彼女たちがこのコースを受講する目的やその意味について報告された。

考察を通して、彼女たちが今後どこへ向かおうとしているのかは定かではないが、日本とブラジルの双方で生きることにより安心感を得ている様子が見えてきた。そうした彼女たちに対し、何年後にブラジルへ帰るのか、どこへ向かおうとしているのか、といった質問を調査者がすることは、彼女たちの安心感を揺らがせてしまう可能性がある。

今後は資格取得と自尊心の関連性の把握や、美容行為を通じた自己イメージの創出に関する考察を深めていきたい。

#### 【質疑応答・コメント】

- ・調査の概要を提示してほしい。
- ・中産階級がリーマンショックの影響を乗り切った話として捉えるべきか、それとも現在のブラジルの経済発展による中産階級の拡大を自分たちとシンクロさせているか。
- ・かつてのブラジルの中産層なのか。現在の日系ブラジル人の中産層に対してアイデンティファイズできるのか。
- ・「合理的」とはいえない明確でない「戦略」。
- ・リーマンショックと資格取得コースに参加することを切り離して考えたほうがよいのではないか。
- ・メイクにどのような価値を見出しているのか。日本的なメイクを学ぶのか、ブラジルのメイクを学ぶのか。日本的なメイクを学ぶことがブラジルで受けがいいから学ぶのか。
- ・ブラジルは格差社会のため外見が大事。日本で学ぶことに意義を見出している。
- ・将来日本でもメイクの世界なら入っていきやすいという状況にあるのか。日本での生活を強固にしていきたいから学ぶのか。
- ・日本に居住するフィリピン人の調査をしたときに、介護の現場に行く人が多くみられた。それは家族を養うために一定の収入を得ないとイケなかったから。これに対して本発表の事例は独身女性で自由な状態にあり、お金を稼がなければならないという義務もない感じを持った。
- ・「投資」といえるか。
- ・証明書はどの程度有効なのか。
- ・証明書（紙）そのものに価値を見出している。証明書をもらうこと自体が目的化してい

る。日本にきてからの生活が何だったのか、証明書を前に無意味でなかったことを確認し、安心感を得ている。

- ・ジェンダー差を見たら、本研究の事例の意味が見えてくるのではないか。男性のスシマン等の事例と比較してみたらどうか。
- ・「在日ブラジル人」と「日系ブラジル人」の言葉の使い方について。「在日」というとこれからもずっと日本にいるという感じ。「滞日」という表現もある。
- ・彼女たちにとって、いつかはブラジルに戻ることが前提となっているが、具体的には何も決めていない。
- ・メーキャップコースを開設した女性はかつてブラジルで日本の化粧品会社のブラジル現地法人で働いていた。
- ・エスニック・ビジネスの流れのなかに位置付けてもよいのか。リーマンショック後、日本政府が失業保険とセットで就労支援としてコース受講を提供していたことがある。

## 1. 発表者2：アンジェロ・イシ（武蔵大学）

タイトル：トランスナショナルなイベントから考える「在日ブラジル人」と「在外ブラジル人」の生活世界

### 【内容】

本発表は、大きく2つの内容について報告された。1つは、報告者が注目してきたブラジルの「ミドルクラス出身」の人々が「失われたミドルクラス的アイデンティティ」を取り戻すプロセスを振り返り、「自己実現」のキーワードからとらえ直した。もう1つは、「在日ブラジル人」を1980年代以降ブラジルから世界に離散したブラジル移民の一部として位置付け、「在外ブラジル人ディアスポラ」の観点から在外ブラジル人の様々な「イベント」に注目することにより、「帰還」、「故郷」、「生活世界」の概念を広い視野で議論した。

まず、1つ目の内容について、80年代から90年代前半は、自己実現そのものを「ブラジルに帰ってからリカバーするもの」として「先送り」していたが、90年代後半になると消費（日本で稼いだ貯金を切り崩す）とレジャー（平日と週末の使い分け）による自己実現が行われ、2000年代は「脱工場労働」による自己実現の模索が顕著になってきたことが紹介された。ここでの「週末」の意味が重要である。在日ブラジル人（ブラジル社会における中産階級）にとって日本での生活はマイナスからのスタートであった。それを補完してゼロに戻すことは失われたものの回復を意味した。

次に、2つ目の内容について、政治イベント、ビジネスイベント、メディアイベント、文化イベントの事例が紹介された。これらの事業には、ブラジル政府、ブラジルのテレビ局、日米の企業家、在米プロモーターなどが関わりあっているが、誰が誰を先導したかについては明らかでなく、「同時多発的」に起こっているといえる。

このようなイベントを通して「在外ブラジル人」としての「ディアスポラ意識」が強化

されていくことは、在日ブラジル人の故郷認識にいかなる影響を及ぼし得るのだろうか。ブラジルか日本かのどちらか、あるいはブラジルと日本の間か、双方に故郷認識があるか、といった二項対立的な見方に留まらず、他の地域に広がる在外ブラジル人にも目を向け始めていることから、彼らの生活世界や故郷認識もブラジルと日本に留まらないのではないか。また、階級や職業の違いのように細分化して考察していく必要があることが指摘された。

### 【質疑応答・コメント】

- ・ イベントは、ブラジル政府のパブリック・ディプロマシーとして捉えることができないか。→政府はどこまで想定していない。ブラジル政府に意識を向かわせるため、ブラジルを離れてもブラジルへの親しみを維持させるため。ベクトルは常にブラジルに向いている。外務省は世界に拡散するブラジル人の人数を把握したいと思っているだけ。
- ・ ブラジル政府が二重国籍を認めたことと関係しているのではないか。在外ブラジル人をブラジルへ引きつけておきたかったのではないか。
- ・ 名刺を渡す対象は誰か。日本人か、他の地域で生活をする在日ブラジル人か。
- ・ 沖縄の「うちなんちゅう大会」を想起させる。在日ブラジル人コミュニティに惨めさを感じていて、それが在外ブラジル人としてのアイデンティティを醸成することによってポジティブな意味づけができるのではないか。個人レベルでこのような自覚があるか。
- ・ 在日韓国人の総連の長にも言えるが、肩書が同胞に対して意味をもつのだと思う。
- ・ 「在外ブラジル人」は連帯化と同時に、差異化・階層化にもつながるのではないか。→日本は他の問題をもつブラジル人と並ぶと「日本でよかった」と思う。合法的に滞在できるから。
- ・ 教会（宗教）が在外ブラジル人の拠点になっている例はないか。
- ・ グローボが介入しているメディアイベントはブラジル国内でも放送されていると思うが、国内の人の在外ブラジル人に対する眼差しはどのようなものか。